

P-094

乳歯の歯根形態異常および永久歯の先天性欠如を認めた重症心身障害児に対して、在宅歯科診療および外来診療下にて歯科的管理を行った一例

芦澤みなみ、梅津糸由子、宇佐見智里、
千 瑛美、伊藤 春子、河野 南、
吉田 愛美、白瀬 敏臣、内川 喜盛

日本歯科大学附属病院 小児歯科

【目的】今回、乳歯の歯根形態異常と多数の永久歯先天性欠如を認めた重症心身障害児（以下、児）に、在宅歯科診療と外来を併用し、歯科的管理を行った1例について報告する。発表にあたり書面にて保護者の同意を得た。【症例】年齢・性別：4歳2か月・男児。既往歴：新生児低酸素性虚血性脳症、高度慢性呼吸不全、家族歴：兄、永久歯1歯先天性欠如。医学管理：人工呼吸器、持続吸引、胃瘻。主訴：歯が欠けている。現病歴：当院口腔リハビリテーション科にて摂食嚥下機能訓練を在宅診療下にて行っていた。下の前歯の破折が気になり当科に精査、加療を希望した。口腔内所見：下顎乳前歯および下顎第一乳臼歯にエナメル質や象牙質に及ぶ実質欠損、全顎的な歯石の沈着および歯頸部歯肉の発赤腫脹を認めた。乳歯の動揺は認めなかった。診断：エナメル質形成不全、齲蝕症第二度、単純性歯肉炎。治療計画：外来にて画像検査、実質欠損部の暫間修復。在宅歯科診療にて口腔衛生管理。【経過】デンタルエックス線写真より乳歯の歯根形態異常、永久歯の欠如が疑われた。齲蝕やエナメル質形成不全部を歯科用修復材にて被覆し、在宅歯科診療下にて口腔衛生管理を継続的に行った。歯石の沈着や歯肉腫脹は改善され、7歳4か月に上顎右側乳中切歯に動揺を認め外来で抜歯した。永久歯への交換期に際し画像検査の方法を検討しCT撮影を行ったところ、6歯永久歯先天性欠如を認めた。7歳11か月に下顎右側乳犬歯、8歳5か月に下顎右側第一乳臼歯の交換期障害のため外来診療下にて抜歯した。医科では2回大腿骨骨折の既往があり8歳10か月に骨粗鬆症と診断された。【考察】今回、撮影範囲や児の姿勢保持の観点から未萌出の永久歯の精査にCTが有用であった。乳歯歯根の形態異常の原因について、全身所見、既往歴や血液検査の結果などから、ビタミンDが低値であり関連が疑われた。呼吸管理下にある児の交換期乳歯の誤飲誤嚥防止のためには、口腔衛生管理と並行して画像診断による歯根や永久歯歯胚の位置や形成状況を把握し、交換期乳歯の適切な対応が重要となる。また、医科や訪問看護師と情報共有を行い、児の歯の状態と日頃の口腔清掃の留意点など連携をとりながら管理していく必要がある。児の口腔健康の維持のためには、早期介入による歯科疾患の予防や交換期乳歯の管理など長期的な計画の立案が重要である。

P-095

肢体不自由児者の心理リハビリテーションを目指した絵本と音楽の活用による支援の可能性の一考察

山本 裕子¹⁾、増田 梨花²⁾¹⁾立命館大学大学院 人間科学研究科 博士課程後期課程、²⁾立命館大学大学院 人間科学研究科

【目的】肢体不自由児者とその保護者対象の絵本と音楽のコラボレーションイベント（以下、イベント）の実態を解明し、肢体不自由児者の心理リハビリテーションを目指した絵本と音楽の活用による支援の可能性を考察する。本研究の心理リハビリテーションとは、身体や認知機能にさまざまな困難がある中、自分らしさの価値に気づき、より好ましい自分へ向かう手段とする。【方法】イベントは一回60分程度、開発者の増田梨花氏が絵本と音楽を組み合わせ、参加者と一緒に大型投映した絵本の読み合わせや童謡の歌い合わせを行う。データ収集期間は、2024年5月から12月である。調査対象は、肢体不自由児者と一緒にイベント参加した保護者とし、研究協力の同意が得られた6名とした。調査方法は、60分程度の1対1の半構造化インタビュー調査を行った。調査ガイド項目は、イベント参加を通じての気づきや感じたこと、自身や自身から見た肢体不自由児者の変化、心を育てることや日頃の介護についてである。同意を得た上でICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。分析方法は、修正版グラウン・デッド・セオリー・アプローチを採用した。倫理的配慮は、所属大学の人を対象とする研究倫理審査を受け、承認を得た（衣笠・人・2023・122）。【結果】分析テーマは、肢体不自由児者の心理リハビリテーションを目指した支援としてのイベント参加した保護者の変容プロセスである。関連する語りの具体例155のコードを基に、6つのカテゴリと29個の概念が生成された。カテゴリは、(1)子どもに障がいがある保護者の思い、(2)楽しみ方の発見と感動、(3)心と身体心地よさ、(4)安心できる時間の共有、(5)心の成長、(6)肢体不自由児者とその家族が希望するサポートであった。【考察】イベント参加した肢体不自由児と保護者はマインドフルな状態を実感し、絵本を介して双方が共感できる安全安心の場や時間の共有が図れた。これにより保護者は肢体不自由児の養育を前向きな気持ちで捉え、多様な出会いや経験が対象児の心の育ちに影響すると認識していた。これらを踏まえ、絵本と音楽を活用した支援は心理リハビリテーションにおいて有意義なものであるとされた。一方で、保護者が望む社会的、人的なサポートの課題が明らかになった。これらを包括した支援を基盤に、身体的、精神的、社会的な繋がりが円滑に促進し、ウェルビーイングに繋がる支援の検討が必要であると示唆された。